南足柄市立足柄台中学校

研究テーマ：「一人ひとりの『学び』を育む指導の工夫」
～学びを人生や社会に生かそうとする力の育成～

１　実践の目的

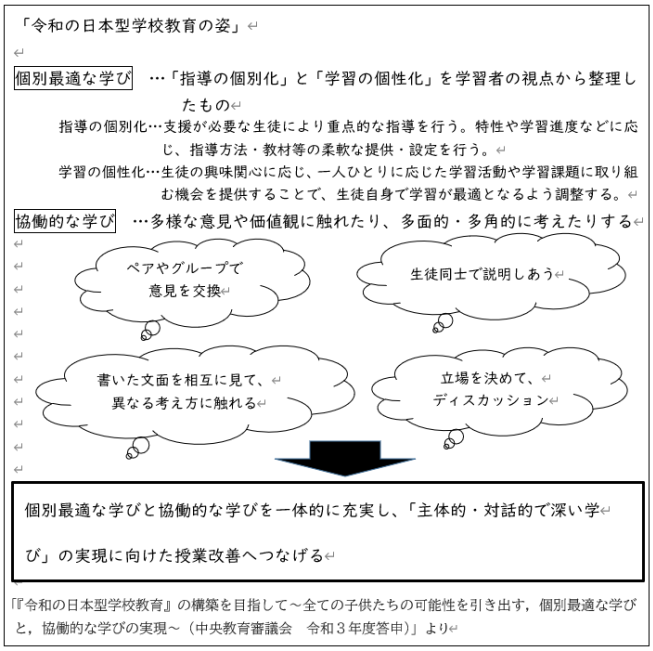
中学校学習指導要領解説総則編では、教育課程全体をとおして育成をめざす資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の３つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、これらの３つの柱で整理したことが明示されている。本校では、これまでの研究の成果を踏襲しインクルーシブ教育、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業研究の成果を継続的かつ発展的に生かしながら、一人ひとりの子どもたちに合った学びを学校全体で追究するために、令和元年度からは研究テーマを「一人ひとりの『学び』を育む指導の工夫」とした。

２　実践の内容

（１）「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な推進

令和３年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築をめざして～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～」では、「令和の日本型学校教育の姿」として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる、とある。ここで実現がめざされている「主体的・対話的で深い学び」は研究テーマにある、本校がめざす『学び』の具体的な姿と大いに重なる。

そこで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる校内研究を進めることで、研究テーマにある「一人ひとりの『学び』」が育まれると考えた。



（２）研究授業・研究協議について

本校では年間１人１回以上の研究授業を行っており、全参観者による研究協議を放課後に行っている。各教職員が研究テーマに則って研究授業を行い、その成果について研究協議を行った。

なお、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は「一体的に充実させる」ものであり、それぞれを分離して実現するものではない。この点については研究を進めるにあたり、教職員の間でしっかりと確認するとともに、各自の授業実践においても、両者を「一体的

に充実させる」意識を明確にして実践を行うように留意した。

参観者は次の３つの視点で授業を参観することとした。

＜３つの視点＞
①生徒の学びが深まった場面と生徒の変化
②生徒が主体的に学びに向かった場面
③テーマに迫る手立て

それぞれの視点について、授業を参観しながらデジタルホワイトボードへ付箋を貼り、研究授業においては、その付箋をもとに研究協議を行った。３つの視点を固定して学校全体で継続的に研究協議を行うことで、それぞれの専門性を超えて研究テーマで謳う『学び』の実現に向けた指導の在り方について研究を深めることができた。

３　実践の成果と課題

（１）一人ひとりの『学び』の深まりについて

全国学力・学習状況調査の教科に関する調査　国語において「目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかを見る」問題について、本校は全国平均より 6.5 ポイント、県平均より 5.1 ポイント高い正答率となった。研究において協働的な学びに向けて授業をつくる際、相手に伝えるということを大切にするように各教科において教師が支援をしてきた。その結果、生徒たちの中に自分とは異なる他者に説明をするにはどのような内容を、どのような形で伝えるのがよいのか考える思考力が磨かれたと考えられる。

（２）学びを人生や社会に生かそうとする力の育成について

生徒会が行った学校内のルールの改訂に関する話合いでは、生徒会本部が改定案について他の生徒により分かりやすく伝えようとする姿勢を見ることができた。また、生徒会本部が提案した改定案を各学級で話し合う際には、それぞれの意見を発表するだけではなく、各意見のよい部分を生かして新しい改定案を検討する姿や、主体的に粘り強く話合いに取り組もうとする姿も見ることができた。授業における協働的な学びをとおして、課題解決を図った経験を教科の学習だけでなく、他の場面においても生かそうとする生徒の姿が見られる。このような姿はまさに本校が研究において育てようとしてきた「学びを人生や社会に生かそうとする力」の一側面であると考える。

４　今後の展開

個別最適な学びでめざすべきは、教師が行う授業の一部が単に個別になるといった形式的な話ではなく、生徒たちが自分たちの学習の自己調整ができているような学習である。このような学習をつくるためには、より計画的に単元で授業を構成するという考えを進めるとともに、ＩＣＴのより柔軟な活用を検討していくことが必要であることがわかった。

また、未だに生徒たちが自分の考えや意見を一方的に述べており、「異なる考え方が組み合わさりよりよい学びを生み出す」という協働的な学びの意義を十分に発揮できていない場面も見られる。協働的な学びは単なる役割分担した結果の集合体ではなく、生徒たち本人でさえ気づいていなかった新しい考え方や気づきが教室の中に次第に現れるような創造的な学習活動である。今後も授業を構成する教師が協働的な学びを行う意義を常に意識するとともに、生徒たちとも共有して学びを進めていきたい。